

地球人への手紙

シャオ 蕭 建亨・作 伊藤敬一・訳 長島克夫・絵



地球人への手紙

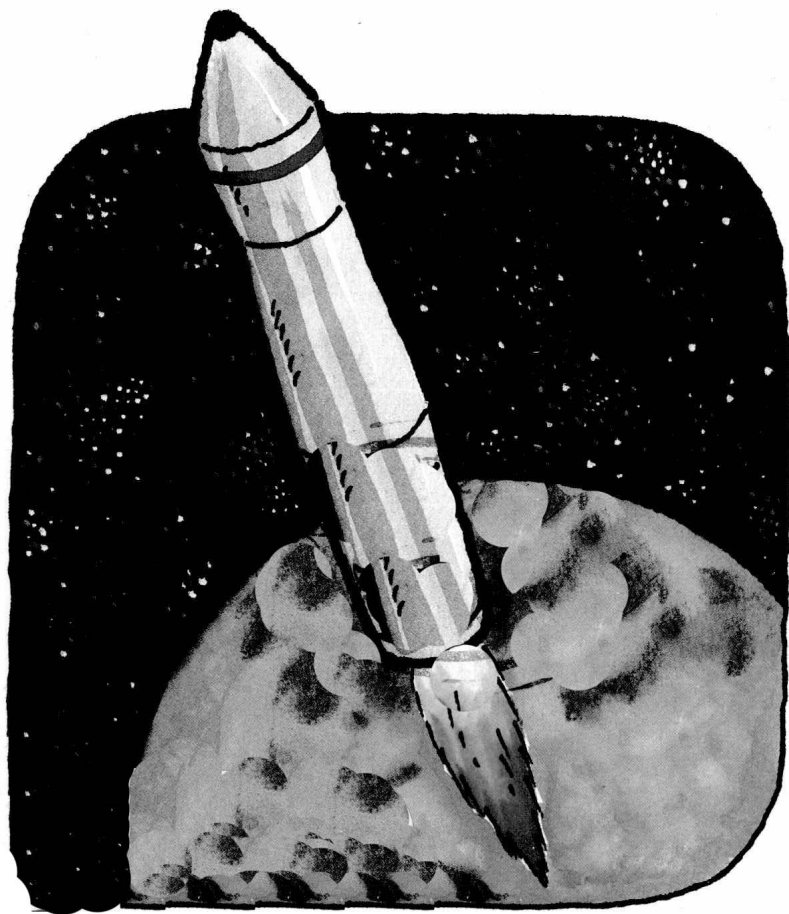
中国の児童文学 (第1集) 1

シャオ ジェン ホン

蕭 建亨・作

伊藤敬一・訳

長島克夫・絵



太平出版社

923	シャオ	ジェン ホン
	蕭	建 亨 作 (伊藤 敬一 訳) 地球人への手紙 中国の児童文学 (第1集) 1 太 平 出 版 社 1984 P 134 22cm

伊藤 敬一 いとう けいいち 1927年愛知県に生まれる。東京外国語学校・東京大学中国文学科を卒業。現在は東京大学教養学部教授として、現代の中国文学および児童文学を研究。おもな訳書に『鼻のないゾウ』『まぼろしの金持ち島』(太平出版社 刊)、『羅文応の物語』『離婚』などがある。

長島 克夫 ながしま かつお 1925年東京の本所に生まれる。デザイナーを経て、63年ころからフリーとなり、現在にいたる。児童出版美術家連盟会員。おもな作品に『クレヨンあそび』『らくがきあそび』『なぞなぞカタカナのえほん』『トントンのおてがみ』『えかきあそび』など多数ある。

地球人への手紙

中国の児童文学 (第1集) ①

1984年1月10日 第1刷発行

著 者 蕭 建 亨

訳 者 伊 藤 敬 一

発 行 者 崔 容 徳

発行所 東京都新宿区弁天町107 石鳴ビル
株式会社 太 平 出 版 社 ©
電話03-204-1351 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。定価はカバーに表示してあります。

親愛なる^{しんあい}

青い惑星の^{わくせい}

すべての友人のみなさん！

この世界に^{せかい}

わかれを上げるさいごのとき、

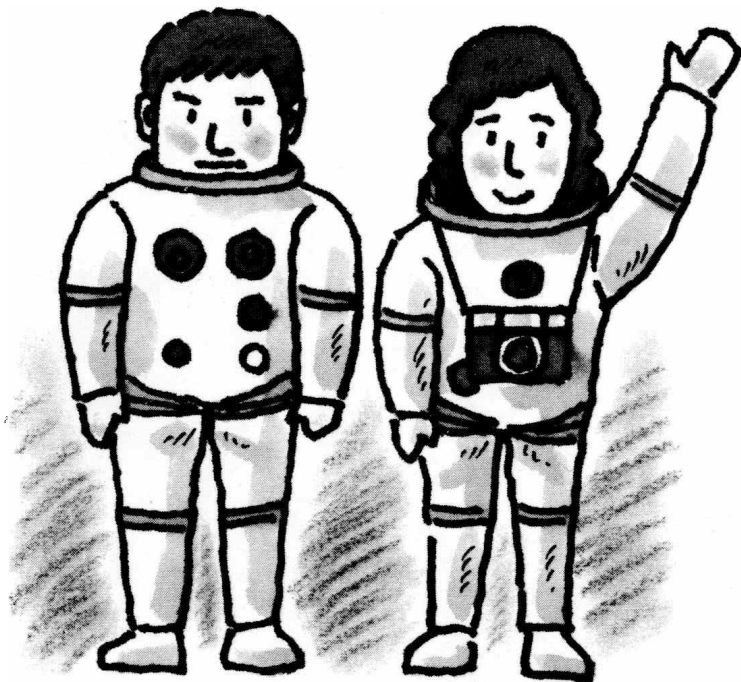
あなたがたに

心からのあいさつをおくります。

金星で遭難した^{そうなん}

ふしぎな宇宙人がのこした手紙は、^{うちゅうじん}

こんなかきだしではじまっていた。



地球人への手紙 もくじ

1 プークのふしぎな運命……… 12

ふしぎなゆくえ不明事件 12

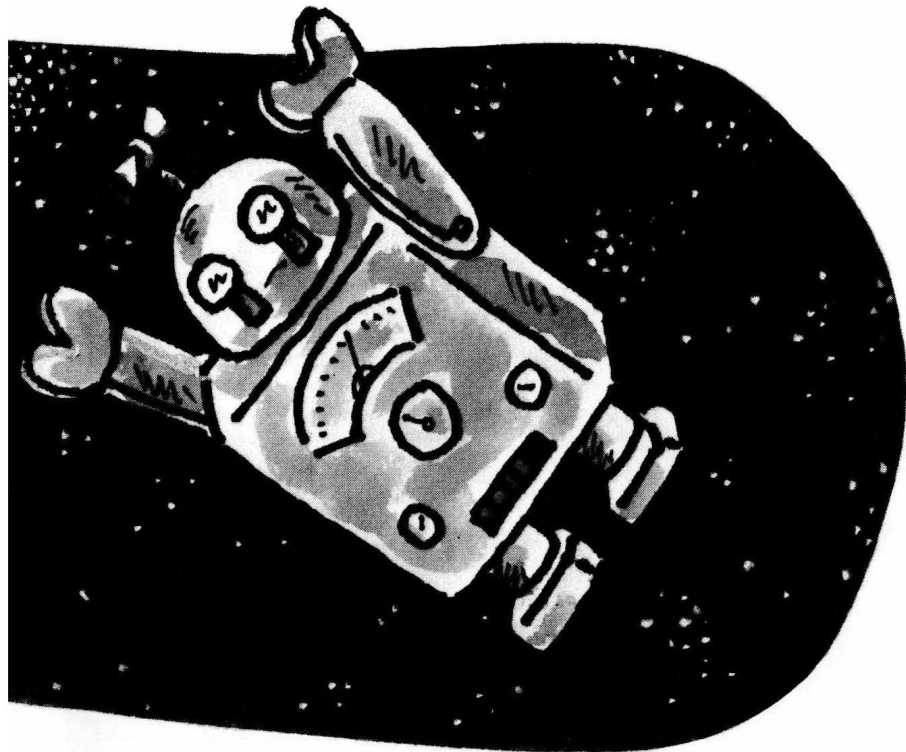
プークはほんものか、にせものか 17

プークのデビュー 22

首だけの犬 27

生と死との格闘 31

プークの正式出演 42



2 地球人への手紙……49

惑星間飛行委員会 50

金星着陸 72

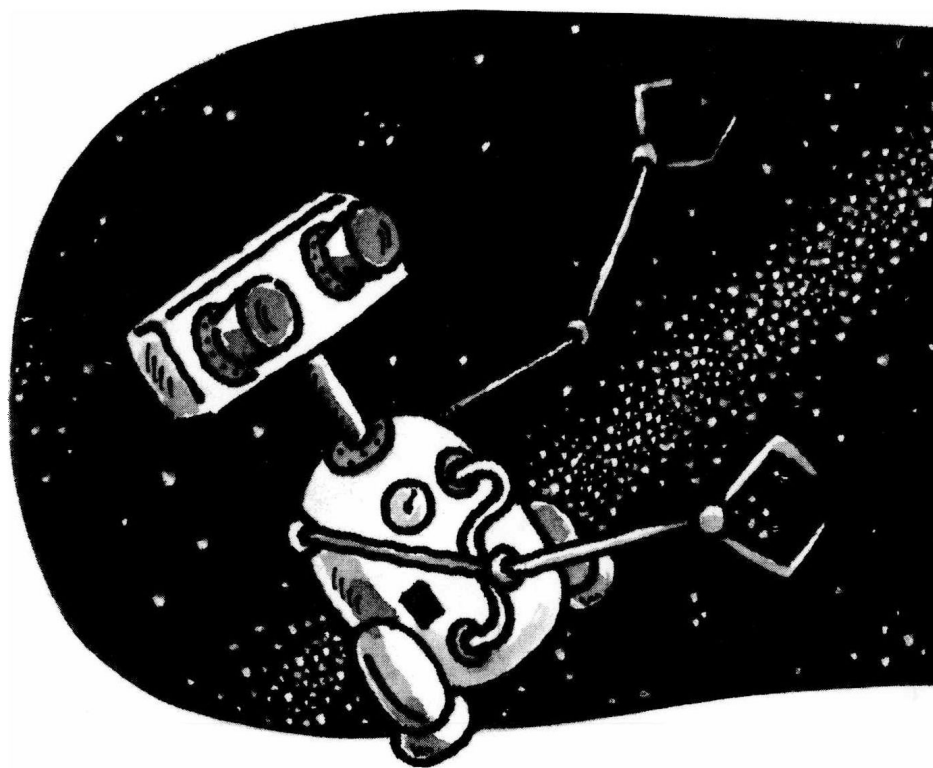
ふしぎな人工衛星 83

宇宙船「探求号」のひみつ

100

訳者あとがき……125

解説にかえて……129

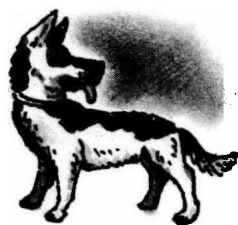


Ⅰ プークのふしぎな運命

1 ふしぎなゆくえ不明事件

これからお話しする物語は、わたしのとなりの李さんのところにいた一匹きのシェパード、プークがとつぜんいなくなり、ふしぎなことに、その後ぶじにもどってきたという話からはじまります。

しかし、プークがいなくなって、またとつぜんあらわれたということには、べつに問題はありません。問題は、つぎのようなことにあるのです。つまり、延河通りにすんでいるふたりの大学生が、目のまえでプークが自動車にひきこられたのをみたというのに、三



か月あまりもたつたいまごろになつて、プークがむかしとおなじようにぴんぴんしてかえつてきたことです。

やはり、はじめからお話ししましょう。

プークというのは、なん人も主人しゅじんを転てんてんとかえた純血種じゅんけつしゅのシェパードです。プークがさいごにサーカスにつれてこられたときには、もう、訓練くんれんにできする年齢ねんれいはすぎていました。サーカスの訓練係くんれんがかりは、この犬を訓練するのをいやがったのです。というのは、なん人も主人の手をへてきていたので、いまさらなおせないようなわるいくせをいろいろ身につけていたからです。

わたしのとなりの李さんリーは、そのサーカスのピエロでした。けつしてすぐれた喜劇役者きげきやくしゃというわけではありませんが、心のやさしい老人ろうじんでした。そして、サーカスがプークをおいだすことになったときと、こんな願いをだしたのです。

「一年間だけ、時間をください。プークをちゃんとしこんでみせますから。」

こうしてプークは、どうにかわたしたち四号アパートの和気あいあいとした大家族の一人いん員となりました。

まったく、プークときたら、とてもかしこくて、はしっこいシェパードでした。やがて、やくそくの一年がおわるころ、サーカスのなかでは、あのがんこな訓練係くんれんがわのほかは、だれもが、プークはやがて正式せいしきにデビューできるものと思っていました。

ところが、ちょうどプークが初舞台はつぶたいにデビューするまえの晩のこと、不幸な事件ふこうじけんがおきてしまいました。三月三日の夕方ゆうがたでしたが、プークは家にかえつてきませんでした。みんなは、三日まちましたが、プークはやはり影かげもかたちもみえません。

三日たつと、李さんリーはげっそりとやせてしまいました。わたしのアパートのひとたちは、みんなそのわけをしっていました。正直しょうじきいって、わたしたちはいままで、李さんリーほどの犬をかわいがったひとをみたことがなかったからです。

日曜日になると、わたしは、アパートじゅうのひとをかきあつめ、あちこちプークをさがしました。わたしがそうしたのは、李さんリーひとりのためだけでなく、どちらかというと、わたしのかわいいむすめ、小恵シオヘイのためでもあったのです。

小恵シオヘイは、五歳さいのとき、足を切断せつだんして、それいらいずうつとベッドで横よこになつていたので、わたしが工場じやうばへ出勤しゅっけんしているあいだは、となり組のおばさんやお友だちがなん人も小



恵のせわをしてくれるのですが、なんといつても片足をなくした子どものくらしはさびしいものです。

しかし、李さんが、わたしたちの四号アパートにひっこしてきてからは、小恵の環境はずっとよくなりました。李さんとプークは、さっそく小恵となかよしになったのです。

プークがきてからは、小恵の生活がたのしいものにかわったばかりでなく、からだまでふとりはじめたのです。しかし、いまは……。李さんをこれいじょう悲しませたくなかったので、わたしはどうしても小恵のことを話すことができませんでした。小恵はプークのために、もう三日間もシクシクなきつづけているのです。

その日は、ちょうど牛乳配達達の王さんと郵便屋の朱さんが、ふたりともお休みの日でした。みんなは手わけして、午前ちゆういっぱいかけずりまわりました。やはり朱さんの神通力はたいしたもので、つぎのようなことをききだしてきたのです。

あの三日の日、延河通りの西のはずれで、一ぴきのシェパードが自動車にひきころされたということです。これは、きっとプークにちがいありません。

ふたりの大学生の話によると、セメントをつんだ十輪の大型トラックが、プークのから

だをおしつぶしていったのをみたということです。プークは、その場ですぐに死んでしまったそうです。

この事件がおこったとき、ふたりはちょうどそのすぐそばにいたので、公安局（警察）に電話をかけにいったのですが、もどってきたときには、プークの死体はなくなっていたということです。

そうになると、悲劇はもはやほんとうのことになってしまったようです。しかし、ふしぎにもプークの死体がゆくえ不明になってしまったことが、かえってこの心やさしい李さんに、かすかな希望をあたえたのです。もしかしたら、プークはかえってくるかもしれない……。

2 プークはほんものか、にせものか

たしかに事件は、これでおわりにはなりませんでした。

三か月あまりたったある日、わたしが工場からかえってきて、わが家の戸口まできたとき、小恵と李さんのわらい声がかきこえてきたのです。わらい声にまじって、うれしそうな

犬のなき声もきこえてきます。

（李^リさんは、また一ぴき犬を手にいれたんだな。）

わたしは、こう思ったのでした。しかし、へやにはいったとたん、わたしは、ほんとうにじぶんの目をうたがいました。プークがいたんです。

「よくごらんになってくださいな。」

李^リさんは、わたしをみると、すぐにしゃべりはじめました。

「きつとどこかのしんせつなかが、プークをたすけだしている、といつてたでしょう。ごらんなさい。とうとう、かえってきたのですよ。」

プークは、まだわたしをみおぼえていました。わたしをみると、すぐなつかしそうにやってきて、わたしにしつぽをふるのです。プークは、李^リさんのすべての訓練^{くんれん}をまだおぼえていました。しかも、小恵^{シヨホイ}がおしえたいいくつかの芸当^{げいとう}もわすれていませんでした。

プークがかえってきたことは、わたしたち四号^{しごう}アパートという大家族^{だいかぞく}の全員^{ぜんいん}にとって大きなよろこびごとになりました。

その晩^{ばん}は、みんながやってきて、李^リさんと小恵^{シヨホイ}にお祝^{いわ}いをいいました。



しかし、よく日、わたしはどうもおかしなことに気がつきました。プークのどこかが、なんとなくいままでとちがつているような気がするのです。はじめのうちは、なんとなくそんなふうに感じたただけですが、よくかんがえてみると、プークの毛の色がいままでとちがうのです。

わたしの記憶力きおくりきときたらかなりなもので、わたしはプークの毛の色がこげ茶だったのを、ちゃんとおぼえていました。いまでも、頭だけはむかしとおなじですが、からだの毛の色はむかしとくらべて、ちよつとうすくなっているのです。

わたしは、プークをそばにひきよせてみました。すると、首のつけ根ねのところに、気がつかないほどの傷きずあとがぐるりとついていて、傷あとの両側うでがわの毛色は、はつきりとちがつているのです。

あのふたりの大学生は、たしかに口をそろえて、プークのからだはトラックにべしやんにこにされたといっていました。それとこれとを思いあわせると、おもわず、じぶんでさえしんじられないようなことですが、プークのからだはもとのものではない、というかんがえがうかんできました。

わたしは、これでも科学的知識をもっている労働者で、迷信などはしんじたこともありません。でも、目のまえの事実は、まるで清代（一六一六―一九一二年までつづいた中国の清の時代）のふしぎな物語をあつめた『聊斎志異』という本にでてくるようなふしぎなことでした。

わたしが注意してプークを観察すればするほど、わたしの結論は正しいとしんじないわけにはいきませんでした。しかし、わたしはこの奇怪なかんがえを、李さんやほかのひとたちには話しませんでした。

ところが、プークがもどつてきて三日めの朝、李さんもとうとうこのことに気づいてしまったのです。

それは、天気の良い日曜日のことでした。わたしは小恵をだいて、李さんが中庭のほうにきてプークをあらつてやっているのをみていました。わたしは窓ぎわにたつて、じぶんの気づいたことを李さんに話したものでかどうかまよっていました。

すると、李さんが、いきなりあわててへやのなかにかけこんできました。なにかにびっくりしたように、息もきれぎれに、わたしにむかつてさげびました。

「プークじゃない、プークじゃない！」

「ばかなことをいいなさい。」

わたしは、わざとこう答えました。

「いや、いや、ぜったいまちがいつこない。」

李^リさんは、ひどく興奮^{こうふん}していました。

「プークの左のわき腹^{はら}の下には、ひとふさ、白い毛があった。あれのつめも、こんなじやなかった。左のまえ足に二本、つめのない指^{ゆび}があった。ところがこれには、白い毛もないし、指のつめもある。しかも、からだの毛がうすくなっている！」

3 プークのデビュー

わたしも李^リさんも、このことをみんなには話しませんでした。話したって、だれもしんじてはくれないでしょうし、せいぜいわらわれるのがおちでしたから。

プークのデビューする日が、とうとうやってきました。四号^{ごう}アパートの住人^{じゅうじん}で、サーカ